

## 不確実な状況に備えるとは？ What does it mean to prepare for uncertainty?

川崎 裕美

Hiromi KAWASAKI

広島大学大学院医系科学研究科

Hiroshima University, Graduate School of Biomedical and Health Sciences

第9回学術集会を、広島大学霞キャンパスで2020年9月にオンライン開催させていただきましてから3年が経ちました。二度とこのような状況が起こらないことを祈りながら、右往左往を振り返りたいと思います。

開催準備は、2019年3月から始まりました。学会にご参加くださる方々に広島を堪能していただくための趣向を楽しみながら考えておりました。もみじまんじゅうははずせないが、放射線看護学会ですから、平和記念資料館、原爆ドーム、さらには、普段の観光では訪れない特別な場所、比治山の絶景と移転するかもしれない放射線影響研究所の独特の建物を是非紹介したい。会場はどこがよいか、そんなことを考えていました。

2020年1月に新型コロナウイルス感染症の流行の予兆が現れました。われわれも、多くの人と同様に、あまり気にはせず、会場の予約、収容人数と使用料、参加者見込み数の算段をしていました。しかし3月になり、感染拡大が報じられるようになると、「石橋を叩く」習性のある当研究室では、構成員一丸となって、毎日がんがん石橋を叩くようになりました。「会場のキャンセル料がかかるのはいつからか。どうする、どうする」、大学で実施すれば、会場キャンセルのリスクを減らせる。「大学構内への入構制限になったらどうする」「学術集会の運営担当者が感染し、他の者も濃厚接触者で来られなくなったらどうする」、最悪の事態も想定されました。決定を延ばせば会場のキャンセル料だけで大きな赤字です。2020年2月ころは、未だオンラインで学会を行っているお手本はありません。まさに学会のテーマの実践です。「不安対策としての平常時の取り組み」。予測できないことに対する不安と戦っていたのです。何もかも解除になり、「なんでオンラインなの？」となるかもしれない。不安が最高潮の頃、理事会の意見をうかがう時期になりました。理事会では、延期、通常開催、オンライン開催のご意見をいただき、4月での判断は時期尚早との意見が多くを占めました。

次年度の運営の人員を考えると延期はあり得ません。対面・オンライン両方開催も選択肢としてありましたが、予算と人員を考えると困難でした。9月に、嘲笑されたとしても、オンラインのみの開催が最も堅実でした。オンラインでの準備時間を、学部教育での実習・授業との関係も含め逆算すると、決定は5月がぎりぎりでした。関連領域の国際学会で、オンラインで実施している学術集会がありましたので、参加登録してみました。IT企業の仕事によるすばらしいものでした。そこは、SDGs、見栄をはずす、やりきるしかありません。

大学の授業で利用しているシステムは使用できないか。パソコンから動画の出力は可能か。「通信料が莫大になるじゃないですか」「動画がフリーズしたらどうするんですか」、オンデマンドが一番安全ですが、一つくらい双方向は入れたいです。禅問答のようなやりとりを何度も繰り返しました。映像の出力変換器とパソコン

には入力ラインの優先があり、一方のラインを使用した後にはうまく切り替わらない、など細かい相性のような現象があり、試行錯誤で、本当に教室のメンバーには心配と苦勞をかけました。妄想でなく、現実にするためには、一つ一つの疑問に根気よく対応していくことが重要でした。

もう一つは、人員と経費の不安です。広島市以外に移動した者は、広島に帰った後に外出を自粛する必要があり、事前に移動計画の調査が必要になりました。まだ採用試験の日程も、試験が対面実施かどうか不明な時期でした。そこで、全員は大学に来ないことにしました。4つに分割し、2会場が実際の交流会、1会場はモニターのみ、個人宅での視聴担当としました。すでに前年度からホームページ作成などで支出されている経費を賄うため、最も経費のかかる抄録集の印刷・郵送を控え、抄録掲載広告を学術集会のホームページバナーとしました。

結果がすべてでもあり、学術集会後には厳しいご意見もいただきました。その後に開催された多くのオンライン開催の学術集会は精練されていました。しかしながら、専門業者を導入せず、限られた人材で予定どおり開催し、おかげさまで、終了後には収支予想に反して抄録集を印刷・郵送することができました。広島大学、研究室の人材を誇らしく思い、学会員の皆様のご協力に本当に感謝いたしました。われわれが、COVID-19 渦中の学術集会運営で学んだことは、放射線看護学の最新の知識のみならず、「かつかつ厳禁」でした。それぞれには1人ずつしか主担当がおらず、心細さはなんともいえぬものであり、開催記録となる抄録集が印刷物として配布できないことは、第9回の欠損を意味しました。結果、不測の事態に備える人員と予算を確保できました。

毛利元就の3本の矢の話を、学会運営の学びから、COVID-19 後改訂するならば、それぞれの矢は、よく点検・手入れされた丈夫な美しい<sup>の</sup>籠を持つ1本でも折れない矢であり、2本までを通常使用とし、1本は必ず不確実な状況のための備えとする。でしょうか。さらに大切な学びは、出番がないかもしれない備えの1本は、いつでもなんにでも対応できる力量を持つ必要があるということでした。

「不確実な状況に備えるとは？」みなさまにとっては、いかがですか。

COVID-19 第7波収束の頃に、  
第9回学術集会の開催に関わっていただいたすべての方への感謝を込めて